

物質文明發達の最期

うじたかれとろろきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八雷神成り居りき。

このような状態だったのであります。八種の雷神がゴロゴロと鳴っておったのであります。この雷神というのは、爆彈の天地を撼がすゴロゴロと爆發する響であります。八種というのは八つには限らない、數の多いことをあらわします。そして蛆がたかつて、爆死した人の死屍が累々と積み累つたところには、死體が腐つて蛆がたかつている——まことにいやらしい悲惨きわまりなき有様であつたといふのです。

このように、イザナミ文化即ち物質文明のみ發達して靈的文化から隔絶された世界の最後の悲惨なる状態が、神話によつて預言されているのであります。唯物論でこの世界が動いて行つたら、物質獲得欲にひきずられて、結局は、そういうことになるといふのであります。

是に伊邪那岐命見畏みて、逃げ還ります時に、其の妹伊邪那美命吾に辱見せたまいつと言したまいて、即ちよもつしこめを遣して、追わしめき。

さきにイザナミの神が「どうぞお覗きあそばすな。冥途の神様にでも相談して、還していただけるように致しますから、どうぞその間、覗かないでおいで下さい」と言われたのに、イザナギの神が火をとぼして、そのウジのたかつて、いやらしいところを御覽になった。それで、「私の恥ずかしいところを御覽になった。この秘密の有様を御覽になったからには、もう還つて貰うわけにはゆきません」というので、豫母都志許賣をつわして追わしめられたのであります。『ヨモツシコメ』というのは、黄泉醜女であつて、冥途の國の醜しい女すなわち死神の軍隊のことであります。繪などを見ると、額に三角の紙を貼つて青白い顔をした白装束の女の幽霊みたいな姿であります。そのような姿の死神の軍隊をつかわして伊邪那岐命を追いかけしめられたのです。

唯物論を投げ捨てた結果

爾伊邪那岐命黑御鬘を取りて投げ棄てたまひしかば、乃ち蒲子生りき。

そこで伊邪那岐命は黒御鬘を取りて、「クロミカツラ」というのは、頭にかぶつておられたところの黒い鬘です。これは、實相の魂ではないのであつて、その上に被っているニセ物の黒い、暗黒の唯物論の思想の鬘であります。上に被っているから鬘をもって象徴したのです。

さて、そういう唯物論の思想を投げ捨てられた結果、『蒲子生りき』というのは、「エビカズ

ラ」とは、野葡萄のことです。野葡萄というのはわれわれが栽培しているような、美味しい葡萄の果實はならないのですが、毎年、草刈者が来て刈り取って行っても、翌年には茫茫とはびこるところの眞に生命力の旺盛なものであります。

この象徴物語は何を意味するかといえますと、頭にかぶっておられる黒御盃（即ち黒い唯物論）を投げすてられたら、生命力が豊富に出てくるものですから、いくら死に神の軍隊が追っかけて來ても、それを防ぐことができますという意味であります。

それでこの生命の豊富なブドウの果實が出て來たというので、死の國の軍隊がそれを食べて暇どっている間にイザナギの神は「生命の國」へとお逃げになつたのであります。

是を撫い食む間に、逃げ行でますを、猶追いしかば、亦其の右の御みずらに刺させる湯津津間櫛を引き闕きて、投げ棄てたまえば、乃ち筭生りき。

伊邪那岐神は、今度は右の御みずらに刺しておられる「湯津津間櫛」を投げられたというのは、奇魂の智慧の光によつて照らされたのです。そして、笄即ち筍がなつたのです。筍というのは、これも亦、生命力が非常に豊富なものであつて、地上に一寸位芽を出しておるのを見つけて、明日探ろうと思つて、翌日行つてみたら、もう一尺も二尺ものびておる。そんなに生命力の豊富なることが起るの、櫛を投げる」即ち奇魂の智慧の光を投げて照らしたら、そんな死の國の闇は消えるとい

う象徴物語であります。

こうして死神が筒を食べている間に、時間を稼いでイザナギの神は逃げてゆかれたのであります。

且後には、其の八雷神に、千五百の黄泉軍を削えて追わしめき。爾御佩かせる十拳劍を抜きて、後手にふきつつ逃げ來ませるを、猶追いて、黄泉比良坂の坂本に到る時に、其の坂本なる桃子を三箇取りて、待ち撃ちたまひしかば、悉に逃げ返りき。爾に伊邪那岐命桃子に告りたまわく、汝吾を助けしが如、葦原中國の所有うつしき青人草の、苦瀨に落ちて、患惚まん時に、助けてよと告りたまいて、意富加牟豆美命と號う名を賜いき。(以上、夜見國の段)

黄泉比良坂の「ヨモツ」というのは、「黄泉國」即ち闇の國で、「ヒラ」というのは、「晝の國」で「サカ」というのは、「闇の國」と「晝の國」との境い目のことでもあります。

さて、その「ヨモツ國」と「ヒルの國」との、その境の峠のところ、「生」か「死」かの境い目の坂本というところで、『桃子を三箇取りて、待ち撃ちたまひしかば、悉に逃げ返りき』というのであります。どんなにイザナミの軍隊(死神の軍隊)が來ておつても、桃の實を三つ取つて、それを死神に對して投げられたら、死の國の軍隊は、悉く逃げてしまったというのであります。

その桃の實というのとは一體何であるかといえますと、これは『生命の實相』であります。桃の果實は生命の象徴であります。

この神話は一方では桃太郎の鬼ガ島征伐のお伽話となっており、これはお伽話といつても、實は神話であつて誰の創作ということはない。個人的作者はなくて、古代の日本民族が、ズツと古く大昔から、靈感によつて宇宙の眞理を直感して物語にしているものであります。

桃太郎のお伽話は、こうであります。お爺さんは山に柴刈りに、お婆さんは川に洗濯に行つたのであります。この「柴刈り」というのは、心の雑草を刈り取つて、そして雑草に蔽われて隠されている實相を、ハッキリ顯わすことであります。そして、「お婆さんは川に洗濯に」ということは、それは實相が垢に汚れ覆われて、その光が輝かぬようになってゐるのを、御禊してそれを綺麗に洗うということです。

心の雑草即ち、迷いの雑草を刈り取つて、清らかな智慧の水で汚れを綺麗に洗つたら、其處へドンブリコ、ドンブリコと「桃の實」が流れてきたのです。お婆さんはそれを拾つて持つて歸つたのでした。「桃の實」というのは、「生命の樹の實」であります。死神に對して「生命の樹の實」を投げると死神は消滅して逃げ出すのであります。これが、桃太郎の「鬼ガ島征伐」であります。「黙示録」の第二十二章二節に「河の左右に生命の樹ありて十二種の實を結び、その實は月毎に生じ、その樹の葉は諸國の民を醫すなり」とありますが、このことは、生命の實相の眞理を説いた雑誌が毎月發行されてゐるのに一致するのです。「生命の樹の葉」と言うのは生命の眞理を説いた、言の葉、と言う意

味であります。古今、東西の靈感の書はいずれも同じ眞理を指し示しているのです。

河の兩岸に「生命の樹」というのがあって、そして月毎に實を結び、その實が「生命の河」を流れ下ってくる、それが桃の實であつて、中から桃太郎が生まれるということになつてゐるのです。こういうヨハネが靈感によつて見たところの状態を書いた「默示録」と、日本人が神話にこしらえたお伽話の桃太郎と符節を合わせて一致してゐるところに、神話というものや、靈感の書というものは、結局宇宙の眞理を感じて、表現したものであつて、その神話が別の民族のものであつて、別の表現をしてゐるけれども、根本的には同じものを感じてゐるのであるということが立證されるのであります。

それで、桃の實を割つてみたら、そしたら其處から桃太郎というのが生まれてきたわけです。

桃の果の形は、あれはまだ陰毛に覆われない處女の生殖器を外から見た象をしております。「陰毛に覆われない」というのは、黒い「迷いの影」にくらまされない生命そのままの、汚れない生命を生み出す器官を象徴するのに適切だということで、桃の果を「生命の樹の實」の象徴として出しているのであります。

それで、その桃の果實は生命を生み出す器官だから、それを持つてきて割つたら、その中から「オギャー」と出てきたのが、桃太郎即ち生命太郎であります。神の生命を内に宿した人間という意味であります。山に柴刈りに行つて「心の雑草」を刈り取つてしまつて、川に洗濯に行つて「心の汚れ」

を綺麗に洗いながして、そして生命の本當の「生命の實相」をあらわしたのです。そして、本當の「神の子」がそこに生まれてきたら、それが生長して鬼ガ島を征伐することができます。鬼ガ島とは、死の國の地獄の鬼を象徴しております。

それでイザナギの神が、黄泉國から追っかけてきたところの、死の使者の鬼共を征伐するためにお使いになった桃の實——生命の實相——は三つあるということです。

その三つの桃の實（生命の實）は何と何とであるかと言いますと、その桃の實の一つは、「日本天皇の生命の實相」もう一つは「日本國の生命の實相」、それからさらにもう一つは「人間の生命の實相」であります。この三つの「生命の實」の相が本當に解つたら、死の國の地獄の鬼は逃げて行くのだということが、『古事記』に示されているわけであります。

そして、今までの「イザナギの大神」即ち「光の大神」によつて象徴される日本の國が大東亞戰爭で負けて逃げてきて、敗戦の状態になったところは『古事記』を預言書として見るとき、この黄泉比良坂の手前のところまでが實現したのであって、これから後に起こることは、『古事記』のこれから先に書かれていますのであります。葦原中國というのは、高天原の「天」（實相世界）に對して「地」即ち現象界であります。青人草とは人類のことで、「人類の憂患のときには生命の實相の眞理で助けやってくれ」と仰せられて、オオカムツミ「大神（生命）の實」の命の名を興えられた。

第七章 コトバによる宇宙淨化

陰陽の調和は、千と千五百との割合である

最後^{いやはて}に其^その妹伊邪那美命^{いみやまのみこと}、身自ら追^おい來^きましき。爾^{すなわち}ち千引石^{ちびきいし}を、其^その黄泉比良坂^{よもつひらさか}に引^ひき塞^さえて、其^その石^{いし}を中^{なか}に置^おきて、各對^{あひむ}き立^たたして、事^{こと}戸^とを度^{わた}す時^{とき}に、伊邪那美命^{いみやまのみこと}の言^{こと}したまわく、愛^あしき我が那勢命^{なせのみこと}、如此^{かくし}爲^なたまわば、汝^{みまし}の國^{くに}の人草^{ひとくさ}、一^{ひと}日に千頭^{ちかしら}絞^くり殺^{ころ}さんともうしたまいき。

それで、いよいよ「敵將^{てきしょう}上陸^{じやうりく}す」とでもいうことになつたのが『伊邪那美命^{いげなのみこと}、身自ら追^おい來^きましき』であります。よもつしこめという、イザナミの死^しの國^{くに}の軍隊^{ぐんたい}が桃子^{もものみ}（生命^{せいめい}の樹^きの果^み）の悟^{さと}りによつて反擊^{はんげき}せられまして、到頭^{とうとう}、逃げ歸^{かえ}つたので、黄泉國^{よもつくに}の大將^{たいしょう}なる伊邪那美神^{いげなのみかみ}様が、閻^{やみ}の國^{くに}から一騎^{きうち}討^{うち}という譯^{わけ}でやつて來^こられたのであります。そこで光^{ひかり}の國^{くに}の伊邪那岐神^{いげなのかみ}様が、千引石^{ちびきいし}——千人^{せんじん}もかからんと動^{うご}かんような大^{おお}きな岩^{いわ}——をドシンとその閻^{やみ}の國^{くに}と「光明^{こうみやう}の國^{くに}」との境^{さかい}目^めの黄泉比良坂^{よもつひらさか}というところに置^おいて、その岩^{いわ}を境^{さかい}として、『事^{こと}戸^と』すなわち離縁^{りえん}狀^{じやう}を渡^{わた}すことになつたので